

中央高地の人

——グエン・ゴク・アンの作品——

中 村 理 恵

はじめに

この小論は芸術家グエン・ゴク・アン (Nguyễn Ngọc Ân) の作品を紹介するものである。アンはヴェトナム中央高地のカンボジアと、ラオスとの国境に挟まれているコントム省 (Kon Tum) の首都コントム市に生まれ、そこで芸術活動が続けている。コントム市は海拔525mに位置し、もともとフランス人の宣教師によって開かれた高地の町であった (Hickey 1982a: 190–197)。1913年から1918年にかけて建設された木造の教会と修道院は、今も使われており、観光スポットになっている。カトリック教徒の多くがバナ族 (Bana) という少数民族である。

アンは現在ヴェトナム美術協会 (*Hội Mỹ thuật Việt Nam*) の会員でエヴァ・カフェ (Eva Café) というコントム市でも有名なカフェを経営している。このカフェの庭に彼の作品が展示されている。アンはまた、コントム市周辺のバナ族の村々を訪ねる特別なツアーも行っている。この小論は、アンのこれらの活動を通して、彼の作品の中に見られる「中央高地の人」というアイデンティティについて考察したものである。

中央高地

アンが生まれ育ち、そして現在も活動の拠点としている中央高地は、未だ国民国家としてのヴェトナムに完全に統合されていない地域、または、統合のための問題を抱えた地域とみなされている。ヴェトナムを統一したグエン朝

(Nguyễn 阮, 1892–1945年) はこの地域を完全に掌握していなかった。伝統的に平地に住む多数民族のキン族 (Kinh) は、山岳地帯に住む少数民族を「劣った蛮人」とみなしてきた。「劣った高地の文化」が「優れた平地の文化」を「汚染」することを恐れたグエン朝は、様々な法令を作ってキン族と高地の少数民族が接触することを禁じた (Woodside 1971: 242–243; Hickey 1982a: 154)。

フランス植民地時代 (1887–1954年)、中央高地は植民地政府によって、特別な地域として取り扱われた。中央高地に最初に分け入ったのは、フランス人の宣教師であったが、そもそもフランスが中央高地に関心をもったのは、国境の防衛からであった。1895年に中央高地は名目上フランスの植民地行政下に入った。高地の少数民族は、植民地政府に税金を納め、16歳から60歳までの男子は賦役を義務付けられ、道路の建設等に従事し、時には私営のプランテーションでも働かされた (Hickey 1982a: 199–224, 291)。

1913年にレオポルド・サバティエ (Leopold Sabatier) が、コントム省のダクラク地区 (当時 Darlac) の長として赴任する。彼の任期中 (1913–1926年) 中央高地における植民地行政が整備された。サバティエはエデ族 (Rhade/Ede) の文化に興味を持ち、中央高地の少数民族の文化に対する造詣が深かった。彼は、フランス・エデ学校や、裁判所、医療施設を高地少数民族のために建設する。彼の任期中、移動式の焼畑耕作をする少数民族の、土地に対する所有権は認められていた。少数民族とその文化を

守るためにサバティエは、キン族や中華系の商人、フランス人宣教師や商人を中央高地から締め出し、高地少数民族の兵士からなる *Garde Indigène* を組織した (Hickey 1982a : 297-308, Salemink 1991 : 248-255, 2003 : 79-87)。

第一次インドシナ戦争 (1945-1954) において、中央高地はフランスの戦略的地域となった。1950年に中央高地は、バオダイ帝 (Bảo Đại) の直轄領、*Domaine de la Couronne du Pays Montagnard du Sud* になり、一般的に *Pays Montagnard du Sud* と呼ばれるようになる。しかし実際には、中央高地の行政はフランス植民地政府によって行われていた (Hickey 1982a : 406, Salemink 1991 : 264)。中央高地に住む少数民族は、フランス植民地政府によって搾取されたが、植民地政府の直接統治により、常に他民族、特に多数民族のキン族とは隔離されていた。それ故中央高地の複数の少数民族の間には、同じ歴史を共有する「兄弟」というような一体感が育っていった (Hickey 1982a : 437)。

1954年のジュネーブ協定によって、ヴェトナム共和国、いわゆる南ヴェトナムが成立する。中央高地は、南ヴェトナム政府の直接の行政機構に組み込まれていく。南ヴェトナムの大統領、ゴー・ディン・ジエム (Ngô Đình Diệm) は同化政策を採用し、少数民族はキン族風の名前を付けるように強要され、伝統的な衣服を着ることを禁止された。サバティエが設置した高地の裁判所は廃止され、ヴェトナム語のみが学校で許される使用言語となった (Jackson 1969 ; Mạc Đuờng 1978 ; Volk 1979 ; Hickey 1982b : 47-60)。ジュネーブ協定後、北ヴェトナムを脱して南ヴェトナムにやってきた移民を吸収し、中央高地を開発するために、キン族を中心とした大量の人々が中央高地に移住した (Volk 1979 ; Hickey 1982b : xviii)。1960年までには、約60,000人が中央高地に移住定住し、1963年には、中央高地の人口の約40%はキン族で占められるようになった。その結果、土地

の収奪が横行し、少数民族が土地を失うという問題が深刻化する (Hickey 1982b : 62)。

共産軍が中央高地の少数民族を取り込むことを恐れた南ヴェトナム政府は、1959年に、要塞村に少数民族を定住させるという政策をとる。少なくとも1945年以降、中央高地の少数民族の65%の村が、別の場所にある要塞村に移された (Hickey 1982b : 228)。この政策の実施には様々な問題があり、要塞村に移された少数民族には、適切な住宅が与えられず、水が不足し、食料の配給も遅れることが多かった。その結果、マラリヤ、食中毒、赤痢などで多くの人々が命を落とした (P. Osnos 1971 : A1, A3 ; Volk 1979 : 80 ; Hickey 1982b : 166)。

政府による強硬な同化政策と、生活環境の劇的な変化によって、追い詰められ困窮した中央高地の少数民族によって、バジャラカ (Bajaraka)、フルロ (FULRO : the United Front of the Oppressed Races) などの反政府運動が組織される。彼らは政府による統制に反発し、中央高地の南ヴェトナムからの分離独立を目指した (Hickey 1982b : 47-62)。

南北ヴェトナムの再統一後、中央高地はヴェトナム社会主義共和国の、必須不可欠の領土の一部として認識された。しかし、中央高地が戦略のために重要だった戦時中とは異なり、ヴェトナム政府は、中央高地とそこに住む少数民族にあまり注意を払わなくなった。山岳地帯に住む少数民族は、社会・経済発展の障害と見なされるようになった。その間、中央高地はヴェトナムの新たなフロンティアとなり、ドイモイ (*đổi mới*) による市場経済導入以降、経済チャンスを求めるキン族や他の少数民族が、北部やその他の地域から大量に中央高地に流入した。

私が中央高地の町、バンメトート (Buôn Ma Thuot) を初めて訪れたのは1993年であった。宿泊したのは、町の中心に立っている政府公営のホテルだった。ホテルの部屋には、窓には小さすぎ、そして強烈に差し込んでくる西日を遮るのには、薄すぎるカーテンがかかってい

た。その窓からは戦勝記念として設置された戦車が見えていた。町にはまばらに高い建物が建っており、通りは静かで、町の中心部以外の道路は舗装されておらず、バンメトートは、砂埃の中に沈んだような町だった。ところが、2011年に再びバンメトートを訪ねた私は、その変貌ぶりに驚愕した。高地の都市に生まれ変わったバンメトートには、1993年に見た、土埃にまみれた町の片鱗を見つけることはできなかった。町はショッピングモールなどの巨大商業施設や人々で埋め尽くされ、舗装された道路の上を、オートバイ、乗用車、トラックやバスがひっきりなしに行きかっていた。

バンメトートがあるダクラク (Dak Lak) 省の人口は、1976年には360,000人であったが、2007年には200万人にまで膨れ上がった (Asano 2007: 42)。ヴェトナム政府は2001年に中央高地で勃発した少数民族による暴動に驚かされた。1998年以降、中央高地では移住してきたキン族と、元から住んでいた少数民族の間で小競り合いはあったが、2001年の暴動は、プレイク (Plaiku)、バンメトート、コントムなどの中央高地の主要都市で、一斉に反政府デモが組織されたのだ。この暴動の原因として、政府による移動式焼き畑農業から代替農業への移行政策の失敗、少数民族の土地の喪失、コーヒー価格の暴落などがあげられている (新江: 2007: 100)。暴動は鎮圧されたものの、2004年にはまた同様の暴動が起こった。これら二つの中央高地における暴動は、政府による中央高地運営の失敗と、そこに住む少数民族が抱える社会的経済的問題を無視してきた政府の姿勢を露呈する結果となった (伊藤: 2009)。中央高地という地域は現在もなお、ヴェトナム政府にとって、神経質にならざるを得ないアキレス腱となっている。

画家グエン・ゴック・アン (Nguyễn Ngọc Ân) の略歴

グエン・ゴック・アン (Nguyễn Ngọc Ân) は

歴史的にも民族的にも特別な中央高地に生まれ育ち、キン族というヴェトナム政府によって与えられた民族への帰属意識よりも、中央高地という特別な地域に対する帰属意識を強く持っている。

アンの母方の家族はもともと、ヴェトナム中部の海岸地方、クイニョン (Quy Nhon) の出身である。彼の母方の伯父は、フランスの宣教師に従いコントム市へ行き、そこでカトリックの神父になった。コントムの少数民族が作る料理に我慢できなかった彼は、自分の妹にあたるアンの母親をクイニョンから呼び寄せ、彼の身の回りの世話をさせた。アンの母はそこで、アンの父と出会い結婚。アンはカトリック教徒の家族の長男として、1959年に生まれた。コントムにおいて宗教は、住民の高地における居住の長さを示す一つのマーカーになっている。一般的に言って、1975年以前に中央高地に移住してきたキン族の人々はカトリック教徒、それに対して、1975年以降に移住してきたキン族の人々の多くが仏教徒である。

カトリック神父であるアンの伯父は、中央高地に住む少数民族の言語を複数話すことができ、アンを自分のようにカトリック神父にしようと考えていた。6年間の初等教育を終えたアンは、13歳でセミナリーに送り込まれた。しかし、規則正しいセミナリーでの生活を嫌ったアンは、結局普通学校に戻ってしまう。アンは子供の頃を、「バナ族の友達と野原や川で遊んでいることがほとんどだった」と振り返る。バナ族の子供たちと一緒に育ったおかげで、アンはバナ族の社会や文化を深く理解しているだけでなくバナ語を流暢に話すことができる。

ヴェトナム戦争が終った1975年、アンが15歳の時、彼は父親を失う。中央高地に共産党軍が迫る中、戦場に行った彼の父は帰って来なかった。アンは今でも、出発する前に母親に言った「子供たちを頼む」という父親の最後の言葉が、耳に残っているという。その後アンの家族には、行方不明になった父親の情報は一切

もたらされなかった。私がアンの友人たちと夕食を一緒にした時、彼の友人が、アンの父は戦争で「死んだ」(he was killed)と言ったのに対して、アンは「消息不明」(missing in action)という表現をとることにこだわった。彼の父の話は、アンとの会話の中で繰り返し出てくる話題であり、消息不明の父はアンにとって、ヴェトナム戦争はまだ終わっていないということを意味している。

戦後の新しい共産党政権下では、父親が南ヴェトナムの兵士であり、家族がカトリック教徒であるということで、アンはいわゆる「よろしくない出自の人」と見なされる。そのように分類された人は大抵の場合、高等教育を受けられなかった。しかし、アンはフエ(Huế)にあるÉcole de beaux art de Hue(現フエ美術大学)に入学することを許される。戦後、大黒柱であった父を失った家族の家計を助けようと、アンは友人と一緒に絵のスタジオを開く。スタジオには広告のデザイン、肖像画、室内装飾などの様々な依頼が舞い込んだ。地域の役所が、政策宣伝のためのポスターを制作することを頼んでくることもあった。これらのことが、コミュニティへの貢献とみなされ、アンはÉcole de beaux art de Hueへの受験を特例として許された。試験に見事に合格したアンは、古都フエで5年間絵画を勉強することができた。

フエでの5年間の学業を終えたアンは、コントムに戻る。本当は、彼はさらに絵画の勉強を続けたかったのだが、プレイクにある文化情報局での就職が決まっていたのだ。しかし、彼の文化情報局での経験は芳しいものではなく、2年間働いた後に辞職する。文化情報局で職員をしているときに彼は仏教の瞑想を始め、辞職後多くの時間を瞑想に費やしている。辞職後アンは屑鉄の売買を始めた。親族や友人たちは屑鉄を買って回るアンを見て、そんなもの売れるはずはないと忠告したのだが、アンが集めた屑鉄は、彼の思惑通り元値の10倍の値段で売れ、これによって彼は生計を立てることができた。

アンは27歳のときに、自分と同じように南ヴェトナム軍の兵士であった父親を戦争で亡くした、コントム出身のカトリック教徒の女性と結婚する。妻の理解と支援によってアンは、ホーチミン市芸術大学(Đại học Mỹ thuật thành phố Hồ Chí Minh)を受験し合格、高等教育機関で絵画を勉強するという彼の夢が叶うこととなった。しかし、彼がホーチミン市で勉強している5年の間、妻は屑鉄のビジネスを一人で行うことができず、その代りコーヒーを売るようになる。彼女が始めた小さな店が、現在のエヴァ・カフェの元となった。エヴァ・カフェを作る前、アンはコントムの民間会社に頼まれて、公園の設計を手掛ける。公園は計画通りに完成したのだが、完成後コントム省からクレームがついた。公園が作られた川沿いの土地は、コントム省の土地だというのだ。結局、公園は省に接収されてしまう。しかし、このことが契機となり、アンは自身のガーデンを作ってそこに自分の作品を置き、自らの芸術的アイディアを表現できる場所を作ろうと思い立つ。ガーデン・カフェ、エヴァ・カフェはこうしてできた。

エヴァ・カフェと「私たちは森を食べる(Nous Avons Mange la Forêt)」ツアー

アンの家族が経営するエヴァ・カフェはコントム市内の静かな住宅街にある。エヴァ・カフェに一步足を踏み入れると、そこはアンの高地の世界だ。アンは中央高地のDNAを保存するためにこのガーデン・カフェを作ったという。失われていく中央高地の文化を、エヴァ・カフェの庭の中に再現しようというのだ。エヴァ・カフェの庭は木々、植物、花々で埋め尽くされている。庭には大きな池と小さな池があり、その中で金魚や小さな魚が泳いでいる。アンの家族が寝起きする、母屋のひさしに吊るされている籠の中の小鳥が、いい声で歌っている。庭にある幾つかの東屋は周囲の木々や草花とよく調和し、中には少数民族の生活用品や楽器が飾られている。少数民族が死者を祀る家の

前に立てる木像に似た木の彫刻が、屑鉄で作った彫刻と一緒に、庭のあちこちに置かれている。アンはエヴァ・カフェの庭そのものを、彼の芸術作品と見なしているようである。

アンの庭と、彼の芸術をより深く理解するためには、彼が主催する「私たちは森を食べる (*Nous Avons Mange la Forêt*)」ツアーに参加することが手助けとなる。ツアー名は、フランス人の人類学者ジョージ・コンドミナス (George Condominas) が、ムノン・ガ (Mnong Gar) の人々の生活を紹介した1959年に出版された本の題名から取ったものだ。アンはスケッチのためにバナ族の村をしばしば訪ねており、彼の中央高地での経験を、他の人々とも分かち合いたいという思いから、このツアーを2009年から主催している。ツアー参加者は、彼らの興味と体力に応じて、バナ族の生活を体験することができる。このツアーに参加するほとんどが外国人旅行者や、ヴェトナムに住んでいる外国人である。エヴァ・カフェの壁には、ツアーに参加した人たちからの、ツアーとアンに対する感謝の手紙が張られている。このツアーに深く心動かされた人の中には、定期的にアンのツアーに戻ってくる人達もいるのだそうだ。

私は、「私たちは森を食べる」ツアーに2012年の夏に参加し、4日間中央高地のバナ族の集落で過ごした。ツアーは、エヴァ・カフェから始まり、国道24号線を2時間ほどオートバイで北上し、コンブラップズ (Kon bráp du) というバナ族の村に着いた。ここで、村長の家にオートバイを置かせてもらい、持ち物をリュックサックに詰めて、徒歩で山に入る。炊事道具や食料などの重い荷を背負って一緒に来てくれたのは、バナ族の60歳ぐらいの男性で、ボンさん (Bong) といった。裸足のボンさんは、20kg 以上はあるであろう頭陀袋をロープで自分の背中に括り付け、軽々とした足取りで山道を歩いて行く。私は彼のスピードについていくのに精一杯だった。3時間ほど歩いた頃、3家族が住む小さなバナ族の集落に着いた。その晩

は、竹と木でできた高床式の家の一つに泊めてもらった。次の日は、午前10時ごろに別のバナ族の集落に向かって山道を歩き始め、目的地には、午後2時頃ついた。私達は、チャウさん (Trau) とノンさん (Nong) という、バナ族の若い夫婦の家に泊めてもらった。夫婦の間には、幼い3人の子供がいた。翌日、私たちは罾を仕掛けに山に入るチャウさんについて行った。チャウさんは、1分たりとも時間を無駄にせずに歩き回り、罾を仕掛け、仕掛けながら、食料となるものを探している。私は、彼の食糧にできる植物を瞬時に見分ける能力に驚かされた。山に入ってから10分もたたないうちに、チャウさんは5種類の食用にできる植物を探し出して、採集したのだ。チャウさんはまた、私達が急な斜面を登れないのを見ると、木や蔓を使ってあつという間に別の通路を作ってくれた。これら全ての作業は造作なく行われた。翌朝罾にかかった野鼠の朝食をいただいた後、私たちはコントム市に戻るために山を下った。

私達が泊めてもらったバナ族の家には水も電気も通っておらず、水洗トイレや湯船、お湯の出るシャワーなどあるはずもなかった。平地での日常の何でもない行為が、高地では一大事業に思われた。私達はバナ族の人たちが栽培したり、山で採集してきたものを食べ、川で入浴し、竹を細く裂いて敷いた床の上で眠った。床下では、豚や鶏が走り回っていた。バナ族の人たちは時計を持っていなかったが、彼らの毎日の生活は驚くほど規則正しいものだった。陽が昇ると人々は起きだし、家畜の世話をし、朝食の準備をする。だいたい午前10時ごろに朝食を済ませると、彼らは畑に向かう。午後2時ごろに畑仕事を終えて戻ってくると、昼食をとり休む。4時か5時ごろになると夕食の準備が始まる。夕食の片付けが終わり夜になると、近所の人たちが一つの家が集まってきて、ろうそくの灯りの下、酒を飲みながら様々な話をする。

アンは私に「私たちは森を食べる」ツアーに参加することによって、バナ族の人々の生活に

ついて理解を深めてほしいと言った。実際、私はこのツアーを通して、バナ族の人々がいかに豊かな自然の恵みを利用して生きているのかを知ることができた。アンは、「山の中では私たちは、彼ら（バナ族）の生徒だ」「私達は、彼らから、山の中で生きていく方法を学ぶのだ」ということを幾度も強調した。彼はバナ族の言葉を流暢に話すので、山にいる間コミュニケーションで苦勞することはなかった。アンは、中央高地にやってくるキン族の民族学者の言語能力の低さについて、少数民族の言語も習わず、ヴェトナム語で押し通す彼らは、無礼で権威的だと批判する。

中央高地の山の恵みが、多くの人口を直接支えられないということは、バナ族の生活を見れば明らかである。移民が流入してくるにつれて、高地の生活は変わっていく。平地の生活スタイルが、どんどん高地にも入ってきている。私は山の中で、オートバイの爆音を聞き、野原やバナ族の家の周りの草むらの上に、紙切れ、ビニル袋、プラスチック、ペットボトルなどが散らばっているのを見て、高地が平地の商業文化によって「汚染」されている感じを受けた。アンはチャウさんに、他のバナ族の人達のように、山を下りてもっと便利な道路の近くで生活してはどうかと聞いたことがあるそうだ。そうすれば、電気も水もあるし、市場にも行きやすく、暮らしは便利になる。これに対しチャウさんは、平野に下りれば実際生活は便利になるだろう。しかし同時に様々な複雑な問題も起こってくるだろう、だから今のまま山にいる生活の方がいいと答えたという。若いバナ族の夫婦が「選択して」山で生活しているということは、私にとって新たな発見であった。彼らには彼らの幸福の基準があるのだ。

「私たちは森を食べる」ツアーを終えてコントム市に戻ってきた私は、少々変な気分であった。オートバイで来たときのように、国道を通りコントム市に戻り、エヴァ・カフェに着いてオートバイから荷を下ろすと、アンはすぐさま

お客で賑わうカフェで働き始めた。私は、ホテルに送ってもらうまでのしばらくの間、カフェの庭でアンを待った。「平地の人々」のざわめきを避けて、今までいた高地の雰囲気にもっと近い場所を、庭の中に探した。庭には、バナ族の炉辺をイメージした常に火が燃えている「台所」と呼ばれる場所がある。その火の傍らに腰かけて、さっきまでいた山の景色を思い返していた。

ツアーのおかげで、私のカフェの庭に対する感じ方は、以前とは少し違ったものになっていた。この庭に身を置くと、山とまだどこかでつながっているような気持ちになった。ちろちろと燃える火のそばに、人懐っこい小さな犬と一緒に座り、煙の匂いをかいてみると、山での毎日が思い出された。それは、私の大学での毎日とは対照的であった。融通の利かない規則、煩雑な事務処理、延々と続く会議、半分眠っている学生を前にしての講義、彼らの書く難解な試験答案の解説と採点。そういった仕事をなんとなくこなしているうちに過ぎていく時間。「食べて寝る」という、単純な日々の活動を、全力で行っていた山での生活と比べると、私の大学での生活は何と欺瞞に満ちているのだろう。私の生活には、何か根本的、根源的なものが欠けているように思えた。そんな私には、山から戻ってきてすぐさま平地での生活にもどり、レジを使ってカフェの客に釣銭を渡しているアンの姿が不思議なものに思えた。

私の「私たちは森を食べる」ツアーのセンチメンタルな後遺症を聞いたアンは、バランスを保つことが日々の生活の中で大事であると言った。山での生活、平野での生活。カフェの経営者としての生活、芸術家としての生活。夫であり、父親である家族人としての生活、一人の男としての生活。私たちはそれぞれ様々な役割を日々の生活の中で果たしている。これらの役割の間でのバランスを取ることが非常に大事であり、そうすることによって、人は多様な人生を生きることができるのだという。それでは、バ

ランスは一体どうやって保つことができるのだろうか。アン自身は瞑想することによって、複数の役割の間での調和を維持しているようであった。プレイクの文化情報局に努めていたときから、アンは本格的に瞑想を始めている。ツアーの最中も私が朝起きると、彼は既に起床して瞑想していた。瞑想が彼の生活の中に調和をもたらし、山と平地を感情的支障なく、自由に行き来することを可能にしているように思われた。

グエン・ゴック・アンの作品「高地の思い出」と「戦争と人間の喪失」

私がグエン・ゴック・アンの作品を最初に見たのは、2011年8月にヴェトナム芸術家協会が主催した中部海岸・中央高地地区展覧会であった。アンはこの展覧会に「高地の思い出」(Nỗi nhớ miền cao) という2009年に描いた作品を出品していた。この作品は先に「命の営み」(Cõi sinh) という別の題で、コントム省の芸術協会が出版した本に載っている。この作品は「私たちは山を食べる」ツアーに参加する以前、単にきれいな絵でしかなかった。しかし、ツアーに参加した後、私はこの絵の意味することを考えるようになった。

この絵の中に単純に描かれている黒い人影は、米の脱穀や大きな酒ガメから管を使って酒を飲むと言った、いわゆる典型的な少数民族の行為を行っている。背景は濃い深いブルーで、そこには星のようなものが淡い優しい光を放っている。少数民族の人影には個性がなく、円状の空間を装飾する影であると同時に、円状の空間にあるリズム感を作り出している。この円状の空間を見ていると、中央高地で経験した生活が思い出された。日々の活動によって規則正しく回転する時間の流れ、自然の営みに沿った生活、家族や隣人との深いつながり。日々の基本的な活動をするために一生懸命だった私にとって、この絵は、山深いバナ族の集落で感じた、静かで内向する精神状態まで思い起させた。

さらに少数民族の人影は、大きな時の営みの

中に生きる、人類全体を表しているようでもあり、暗い空間の中で、コスミック・リズムを踏んでいるようにも見えてくる。私たちは皆、大きな宇宙のサイクルの中にいるのだ。少数民族を抽象的な人影で表現することによって、アンは彼らを少数民族 (sắc tộc) という特有のカテゴリから解き放っている。彼らは、「見慣れない風変わりな風習を持ち、エキゾチックな民族衣装に身を包んでいる他者」ではないのだ。彼らは、私たちを含めた人類を代表し、世界全体の流れの一部なのである。この絵をそのように解釈するならば、「命の営み」という古い題の方が、「高地の思い出」という新しい題よりもこの絵にふさわしいように思われる (写真1参照)。



写真1 「高地の思い出」プレイク市、ヴェトナム中部海岸・中央高地地区展覧会にて (2011年8月27日中村理恵撮影)

アンはかつて、お土産絵画と呼ばれるような少数民族の女性を題材にした絵を描いていた。こういった絵には人気があり、彼が描いた絵は売れてしまい、手元に残っているものはほとんどない。アンはしかし、現在そのようなお土産絵画を描いてはいない。アンにとってそのような絵画は、単なるきれいな壁の飾りであり、いかなる感情も呼び起こさない意味のない作品で

あるからだ。アンは人生は旅であり、絶え間ない変遷だという。それ故作品も一つの様式に固執せず、絶えず変化していかなければならないと考えている。彼の作り出す作品は、その材料やスタイルを絶えず変化させている。しかし、彼の作品は変わることのないメッセージを発信している。それは、「中央高地の人」としての彼のアイデンティティだ。

彼の「中央高地の人」としてのアイデンティティは、彼のバナ族との親密な関係と、戦争に対する深い憤りによって創作された作品で表現されている。2012年に開催された中部海岸・中央高地地区展覧会に、彼は屑鉄で作った彫刻を出品した。この彫刻は「戦争と人間の喪失」と題した、地雷を踏んで粉碎される人間の瞬間をとらえたものである。アンは浅い四角い箱の中に砂を敷き、その上に彫刻を立てた。その足元には、ヴェトナム戦争時代に実際に使われた地雷がねじれた布に覆われて置かれてあり、二つのヘルメットが地雷の両側に置かれている。粉碎される被害者の体は、神経質に波打っている複数の細い鉄の棒で表現され、その足には有刺鉄線が絡まっている（写真2参照）。

中央高地では、キン族も少数民族も南ヴェトナム軍と北ヴェトナムの共産党軍の間に挟まれ、大量の死傷者を出した。アメリカ陸軍中佐、トーマス・マケナ（Thomas McKenna）は、アメリカ軍の間でイースターの攻撃と呼ばれている、中央高地を震撼とさせた1972年の、コントムにおける戦闘について回想している。共産党軍の攻撃はゲリラ攻撃ではなく、北ヴェトナムの正規軍による砲撃であり、中央高地が初めて洗車によって攻撃された⁽¹⁾。コントムは、北ヴェトナム正規軍によって包囲され孤立し、コントム市内の人口は、周辺からの避難民で一挙に膨れ上がった（McKenna 2011）。

幼かったアンは中央高地における戦闘を経験し、多くの人々の苦痛と悲しみを目の当たりにし、彼自身もまた戦争の犠牲者となった。彼は1972年と1975年の中央高地における戦闘を、忘



写真2 グエン・ゴック・アンと「戦争と人間の喪失」クアンガイ市、ヴェトナム中部海岸・中央高地地区展覧会にて（2012年8月19日中村理恵撮影）

れることのできない強烈なイメージと共に記憶している。敵からの砲撃があった時、彼の通う学校の教師は、児童たちに机の下に隠れるように指示した。薄っぺらな木の机が、彼らを砲撃から守ってくれる道理はなかったのだが、アンたち児童は、恐ろしさのあまり机の下に飛び込んだ。1975年に共産党軍が中央高地に押し寄せてきた時、サイゴンの政府は中央高地を見捨てて共産党軍に引き渡すという流言が飛び交い、恐怖に陥った人々は中央高地から逃げ出した。アンの母親は幼い子供たちを連れて、国道19号をバ（Ba）川流域にあるフボン（Phu Bon）というところを目指して歩いた。途中、アンは道端に横たわる死者や負傷者を見た。日が暮れ、アンの家族は道端に止められた壊れた車の下で一晩過ごす。翌朝、アンは、彼ら家族の近くで休んでいた人たちが、亡くなっているのを発見して恐怖を覚えたと述べている。アンの家族は、南ヴェトナム軍と共産党軍の間に挟まれ、

結局中央高地を脱出することができず、コントム市に戻らざるを得なかった。この失敗に終わった避難の中で、アンは多くの人が、両軍の銃撃戦の犠牲になり死んでいくのを目撃している。その犠牲者の多くが、まだ幼い子供たちだったという。戦争によって人々が払った犠牲、被った苦痛と悲しみを考えると、戦争の記憶が忘れ去られていくことを、何としてでも防がなければならないというのが、アンの信念である。インタビューの中で、アンは「若い世代の人たちに、戦争がいかに残酷で悲惨なものを伝えていくことが、私に課せられた使命だ」と述べている。

エヴァ・カフェの入口には、屑鉄で作られた高さ約2.5メートルの、兵士の像がある。この像は、戦時中に使われた爆弾で作られている。アンは爆弾を縦に二つに切り、それで、兵士の胴体を作った。爆弾を二つに切ったのは、兵士は常に自分の体の半分、つまり家族や愛する人々を故郷に残して戦場に行くからだ。兵士の行動を拘束する法律や、規則、命令が兵士の体に巻かれた三つの輪で表現されている。兵士の胸にはハート形の穴が開いており、穴の前には、反戦のシンボルマークがペンダントのようにぶら下がっており、兵士の抑圧された本当の気持ちを表現している。材料として使われた爆弾はアメリカ製である。したがって、この兵士はアメリカ兵だと考えることもできるが、戦争をテーマにして創作する場合、アンはどちらの側にも味方せず、特定の人や政府を批判するようなことはない。彼が表現しようとしているのは、戦争によって苦しめられた、人々すべての苦悩と悲しみである（写真3参照）。

おわりに

アンの作品の根底に流れているのは、「中央高地の人」という堅固なアイデンティティである。彼の作品は中央高地の少数民族に対する心情的な近さと理解、共産党軍と南ベトナム軍が闘う戦場となった中央高地の戦争被害者とし



写真3 兵士の像 エヴァ・カフェにて（2012年7月18日 中村理恵撮影）

ての悲しみと憤りに根差している。中央高地に対する特別な感情と中央高地を特別な地域とみなして、そこを自らのアイデンティティの基盤とするアンの考え方は、彼が文化情報局、共産党、中央官庁と一定の距離を保ってきたことから読み取ることができる。中央高地は常にそういった、中央権力の統制に抵抗してきたのだ。

ベトナムでは、自分が中部人、北部人、南部人であるというような、地域的なアイデンティティを強く表に出すというような風潮が、近年出てきているように思う。私は、ベトナムに行くと、よく南部の社会科学院（現 Southern Institute of Sustainable Development）で働いている研究者と夕食を共にする。そういった夕食会で、メコンデルタや南部地方で調査研究を続けている、オーストラリア人の人類学者、フィリップ・テイラー（Philip Taylor）が出版した本のことが話題になった。彼らは口々に、

この本を褒め、テイラーは南部の文化を本当に理解していると言った。その証拠に本の中でテイラーは、南部は北部とは異なる文化体系を持ち、異なる歴史的発展を経験してきた、と述べているという。更に彼らは、南北ヴェトナムの再統一によって、南部固有の文化が失われつつあると言って嘆いた。このような発言は、1990年代の半ばにホーチミン市に住んでいた時には聞いたことがなかった。そう思っている人がいたとしても、これだけ大っぴらに明言する人はいなかったのである。当時私がよく聞いたフレーズは「北部には文化があり、南部には金がある（でも文化はない）」というものだった。夕食会で聞いた、南部の研究者の文化の異質性を基盤とした「南部人」としてのアイデンティティの主張は、私を少なからず驚かせた。今や、統一ヴェトナムという均一化した国民意識から、もっと細分化された、地方の歴史的、文化的独自性に根差したアイデンティティを主張できる「スペース」ができてつつあるようだ。

アンのアイデンティティは、ヴェトナム北部の人でもなければ、南部の人でもない。中央高地の人というものであり、それは、ヴェトナムがアイデンティティの多様性を、許容してきていることを表している。アンの作品は、共産党政権下のヴェトナムにおける、アイデンティティの多様化や多種化、複合化への可能性を暗示している。

注記

- (1) マケナはもし1972年の戦闘において、コントムと中央高地が北ヴェトナム軍の手に落ちたならば、南ヴェトナムは分断され、敗北していただろうと述べている。彼によれば、コントムの戦い、または、イースターの攻撃と呼ばれる戦いが南ヴェトナムを救ったのだ (McKenna 2011 : 3, 72)。

<参考文献>

- Asano, Eiji
2007 "Growth process of Coffee production in Vietnam: Use of surplus resource and migration" in Thanh Phan, H'wen Niê K'dăm and Ikemoto Yukio Eds. *Coffee in Vietnam's central highlands: Historical, anthropological and economic perspectives*. Ho Chi Minh City: Vietnam National University Ho chi Minh City Press. pp38-51
Hickey, Gerald C.
1982a *Sons of the Mountains: Ethnohistory of the Vietnamese Central Highlands to 1954*. New Haven, Connecticut: Yale University Press.
1982b *Free in the Forest: Ethnohistory of the Vietnamese Central Highlands, 1954-1976*. New Haven, Connecticut: Yale University Press.
伊藤正子
2003 「タイ族・ヌン族の国内移住の構造：ヴェトナム東北山間部少数民族のネットワーク」 *東南アジア研究* (Vol. 40 No. 4 : 484-501.
2009 「『先住民』を認めることができないヴェトナム」 *人権と部落問題* 61 (1) : 33-41.
Jackson, Larry R.
1969 "The Vietnamese Revolution and the Montagnards." *Asian Survey*, 9(5) : 313-330.
Mạc Đu'ò'ng
1978 "Research: The Neo-Colonialism of the United States and the Ethnic Minorities in Southern Vietnam." *Hanoi Tap Chi Cong San* No.2, Feb : 89-96.
McKenna, Thomas P.
2011 *Kontum: The battle to save South Vietnam*. Kentucky: The University Press of Kentucky.
Osnos, Peter
1971 "'Security' a Disaster for Montagnards." *Washington Post*, April 25 : A1, A3.
Salemink, Oscar
1991 "Mois and Maquis: The Invention and Appropriation of Vietnam's Montagnards from

Sabatier to the CIA”, in George W. Stocking
Ed., *History of Anthropology*. USA: The
University of Wisconsin Press, pp.243–284.

2003 *The Ethnography of Vietnam's Central
Highlanders: A historical contextualization, 1850–
1900*. London & New York: RoutledgeCurzon.

新江利彦

2007 *ヴェトナムの少数民族定住政策史* 東京：
風響社

Volk, Nancy

1979 A Temporary Community in a Temporary
World, Ph. D. Dissertation at Department of
Anthropology, University of Washington.

Woodside, Alexander

1971 *Vietnam and Chinese Model: A Comparative
Study of Nguyen and Ching Civil Government
in the First Half of the Nineteenth Century*.
Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

(客員研究員・マレーシア北部大学

国際関係学部客員講師)